

中国考古学の諸問題 (一)

はじめに

水 野 清 一

考古学の研究には、発掘が最大の武器である。発達のおくれた中国の考古学も、野外工作の経験をつんで、みちがえるように進歩した。ことに一九五〇年以後の、めざましい、かずかずの発見は、世界の学界に大きな反響をよびおこし、また期待を生ぜしめた。もちろん、それは新中国の、さかんな建設にもなつたものであるが、やはり、中国の、かねてつみかさねてきた野外工作が基礎になつてゐる。もし、このとうとい経験がなかつたならば、とうてい、これだけの成果はあがらなかつたかも知れない。

一般に中国の発掘は過小評価されがちである。もちろん、そういう面もないではない。けれども、十年十五回の安陽殷墟の発掘や現場を研究所とした房山周口店猿人洞の長期工作は、発掘についても、本格的な訓練をあたえたし、ものおちしない自信をあたえたとおもふ。だから、どんな大きな発掘にもおどろかないし、どんな迅速な

工作にも応ずる力がある。一九五〇年以後の大建設にともなう応急調査に、かなりととのつた成績をあげえたゆえんである。

新中国は、まず一九五〇年の河北周口店猿人洞、河南安陽武官村殷王墓の発掘を手にはじめに、一九五一年の湖北長沙戰國西漢墓の発掘、一九五二年の河南洛陽殷周墓、禹県白沙戰國墓、鄭州二里岡殷代遺跡および河北唐山賈各庄戰國墓の発掘、一九五三年の河南安陽大司空村殷墓、洛陽燒溝戰國西漢墓の発掘、五年から五年にわたる河南輝興殷周秦漢墓の発掘をおこなつた。一九五四年、五年からは、西安、洛陽、鄭州の各地において発掘が長期化するとともに、研究所や博物館がつくられ、また河南三门峡のダム工事、甘肅劉家峡のダム工事に、大規模な調査発掘隊が編成された。しかも、新建設が全中国におよんでいるごとく、調査発掘の工作も全国にわたつていて、大小の発見が、夜に日についてあらわれているありさまである。

そうして、これら精粗さまざまの発掘成果は、いちはやく月刊『文物参考資料』、隔月刊『考古通訊』、季刊『考古学報』によつて逐一報告され、われわれをして新発見のニッスによるこぼせるとともに、その応接に目まぐるしいおもいをさせている。もちろん、すべての報告が、みなよくできているというわけではない。なかには、あいまいなものもある。けれども、迅速に報告されるということはいふことである。もう今日では、『文物参考資料』も九十二冊、『考古通訊』も二十二冊、『考古学報』も十九冊になつてゐるし、『基本建設中出土文物展覽図録』(一九五四年刊)、『楚文物展覽図録』(一九五四年刊)、『五省文物展覽図録』(一九五八年刊)等の展覧

会図録はもとより、『白沙宋墓』『南唐二陵』(一九五七年)、『浙南古画像石墓』(一九五六年刊)、『望都漢墓壁画』(一九五五年刊)、『輝県発掘報告』、『蔡侯墓遺物』(一九五六年刊)、『長沙発掘報告』(一九五七年刊)等の発掘報告から、『長沙漆器図録』(一九五五年刊)、『古代石刻画選集』(一九五七年刊)等の図録類まで、かぞえたてればいたつて多い。それに戦前たえて発表されなかつた安陽殷墟の発掘記録も、いろんなかたちで発表され、『小屯』第三本、陶器の上半も、一九五六年には刊行をみた。したがつて、これを一々点検することは、いまでは容易なことではなくなつてゐる。本誌が、以下の項目にわかち、ここに紹介しようとするのは、まさに、そのためであらう。

一、新出西周金文編年の諸問題

伊藤 道 治

西周青銅器銘文の研究特にその編年的な研究には、二つの大きな流れがある。一つは歴史を推定して一種の歴史を復原し、これに銘文にあらわれる年月日・月象をあてはめて行く方法で、これには、呉其昌氏の『金文歷朔疏証』(一九三六年)と董作賓氏の「西周年歴譜」とが代表的である。二は、銘文中にあらわれる人名・歴史的事実・地名などによつて、銘文を幾つかの群にわけ、これを文献的な史料と比較し、更に群ごとの銘文の形式・字体・器形・文様などの相対的な関係をたどつて編年するもので、郭沫若氏『两周金文辭

大系』、貝塚茂樹氏『中国古代史学の發展』(一九四六年)、更に最近には陳夢家氏の「西周銅器断代」がある。この方法の何れが、出土遺物の研究により實際的なものであるかは言うまでもない。従つて、この論考では、その範圍を第二の方法に限つて述べることとする。

さて最近における青銅器銘文の研究は、陳夢家氏の「西周銅器断代」の発表によつて、新しい段階に入つたと考えられる。これまで、銘文の体系的な研究は、郭沫若氏の『两周金文辭大系』(一九三三年)を中心として行われていた。然るに最近になつて新しい資料が出土したり、或は私蔵されていた青銅器が学界に紹介されたので、こういう新資料を含めて、改めて体系的な研究を行う必要が生じた。これに先ず着手したのが、陳氏の論考である。この論文は『考古学報』第九冊から同第十四冊(一九五六年第四期)の六回にわたつて連載され、中絶してしまつた。従つてその全容は知り得ないが、孝王の時期即ち西周時代のなかばまで及んでいるので、この時期までの研究については、陳氏の論文を中心として眺めて見よう。但し陳氏のとりあげた銘文のすべてに言及することは、紙数の關係で不可能であるから、今回は出来るだけ、新出資料に重点を置き、他は、末尾にあげた附表を見られたい。またこの論考は樋口隆康氏の「新発見の西周銅器群とその問題点」と関連する所が多いので常に参照された。

新出或いは新紹介の資料のうちで、最も注目されるのは、何といつても、保卣・保尊、宣侯矢斝、召尊・召卣の三組の銘文で、何れも周初の東夷征伐に關係のある青銅器である。先ずこの三つの金文